東京バッハ合唱団 月報

［第 655 号］2017 年 1 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101
Tel: 03-3290-5731　Fax 専用: 03-3290-5732　郵便振替: 00190-3- 47604
Mail: office@bachchor-tokyo.jp　http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO
Monthly Newsletter No. 655
January 2017

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

「この幸 歌えや」――カンタータ第 140 番、終曲コラールより

第 114 回定期演奏会の成功を祝す

高梨 公明（春秋社・編集部）

114 回目の公演、まことにおめでとうございます。来年は、合唱団創立 55 周年という記念の年を迎えるとのこと、これまでの並々ならぬ継続の力、日頃の皆さんのご努力の積み重ねには、ほんとうに頭が下がる思いです。

日々の練習もさることながら、恒例となっている夏の合宿も合唱団にとっては、格別の機会なのでしょう。昨年 8 月の野尻湖には三十数名が参加され、長野県信濃町のみなさんとのコラボや国際村神山教会での「湖畔のバッハ」コンサートなど、大いに盛り上がりをみせた由、私宛に届いた絵はがき（団員の方たちの寄せ書き付き！、「目の前の黒姫山がきれいです……」）を眺めながら、酷暑の東京から練習に励む皆様に思いを馳せたものです。そしてその練習成果の発表の時、大村先生はじめ皆様の音楽する歓びに、今日も客席からエールを送っておりました。

ところで、「継続」と言えば、毎月送られてくる「月報」があります。創刊から一度の休みもなく、続けられていると伺っております。合唱団の活動の近況と記録、感想等（時には論考も）、多方面に亘って綴られていて、毎回楽しみにしておりました。

公演の一週間ほど前のこと、12 月号が送られてきました。ふと見ると、月報の上部に付箋が貼られていて、そこには「闇の世に灯を！」とあります。おそらく大村先生の筆になると思われるこの一言。これは何を意味するのだろうと、いささか心に引っ掛かるものを感じたのです。が、その思いはしだいに納得できるものに変わっていきました。

ひょっとしたら、このメッセージは大村先生の時代観、ひいては音楽観を表すものである、と。音楽は（バッハの音楽にしても）、たんに楽しみや喜びを共有するだけではなく、もっと大きな視点で考えなければならない……。純粋な音楽的営みであって何がいけないのか、そんな反発も出てきそうですが、考えてみれば、いかに芸術といえども、それが社会から遊離して存在するようなことはあり得ないし、美的に独立した芸術観というのも余り説得力をもたないことは言うまでもないところです。そうではなく、音楽を通じて、つねに人々の理想の高みを志向すべきものであることに思い至った次第です。

現に今回のコンサートのテーマは「危機と平安―バッハの人生表現の深み」。こうしたテーマの設定は一昨年、南相馬市での公演の際にも（「災害に耐えて希望と信頼に生きる」）、前回 5 月の公演でも（「日常生活のバッハ―教会暦をたどって」）、選曲ともにふさわしいものでした。昨今の社会情勢に、人間の生活の一年のありようを見つめ直すとでも言いましょうか。そうした意味で、大村先生の胸の内の一端に触れ、大いに共感することになったのです。

さて、毎回ユニークな試みがなされる本公演ですが、今回のコンサートでは、『アンナ・マクダレーナ・バッハの音楽帖』からの声楽作品が披露されました。改めてコンサート形式で聴く美しい小品の数々。大村先生による編曲（大譜表から四声体へ）は、もう自家薬籠中のもので、定評ある格調高い訳詞とあいまって存分に楽しめました。とくに、7 曲目（音楽帖 39a）のコラール《わが主 み神 われ歌わん》は、晴れ晴れとした

■第 114 回定期演奏会 2016/12/3、府中の森芸術劇場ウィーンホール
（写真提供：パラビジョン・竹内惠様）

ソプラノ独唱の後に、四声体の 2 節が歌われ、プログラムの訳者コメントにあるように、大バッハの愛妻への感謝の気持ちが彷彿としてくるようでした。かくも微笑ましい家庭音楽会の模様がこうしたかたちで再現されるというのも、おつなものですね。バッハの生活信条が音楽に託して伝わってくるようです。

プログラム後半の 2 曲はもう名曲中の名曲。第 82 番カンタータ《われ 足れり》の山本悠尋氏の見事な歌唱で、この曲の素晴らしさがいっそう引き立っておりました（この曲も、日本語で聴くとほんとうに真に迫ってくるものです)。そして、第 140 番《目覚めよと呼ばわる 物見の声たかし》。第 4 曲の有名なオブリガート旋律は、むかし（中学生の頃)、友人といっしょに口笛で吹いて、コラールが入るとどちらか一方が担当し（これが実によくハモるのですね)、飽かず繰り返しては遊んだりしていました。かの友はどうしているか……、そんなことを思い出しながら帰途についたものです。

第 114 回定期演奏会 ご来場者アンケート

❶演奏全般について。❷とくに、日本語演奏について。❸その他、運営・会場等、何でも。❹何回目の来場？： 初めて、2 回目、それ以上

＜1＞ ①良かったです。②分かりやすかったです。③良かったです。④初めて

＜2＞ ①素晴らしかった。②良かった。③皆様のご努力に感謝します。④2 回目

＜3＞ ④多数

＜4＞ ①楽器の響きもさることながら、声の通りが良かったと思います。②分かりやすく良いと思います。③ふだん聞くことが少ないので、歌うなんてとてもと思いましたが、周囲につられ、つい声が出てしまいました。④2 回目。出演者から

＜5＞ ①すばらしかったです。②意味が分かり、大変よかったです。③パイプオルガンがある会場はよかった。④初めて

＜6＞ ①すばらしい。感動でした。②先生の訳はすごいです。また宜しくお願いします。

＜7＞ ①皆さま一丸となって力強く、若々しい演奏でした。②解りよくて良かったです。それにしてもバッハはむずかしいですね!! ③皆さまのお心づかいを感謝いたします。いろいろとご苦労が多かったことでしょう。④7～8 回

＜8＞ ①オルガンも含めた演奏、歌唱が、会場の素晴らしさとあいまって良かったです。③最後にみんなで歌うのが、もっと簡単だと良いと思いました。④初めて

＜9＞ ①とても良かったです。とくに後半がすごかったです。楽器もすごく良い音で気持ち良かったです。山本さん本当にすてきでした。ファンになりました。②入魂して聞けました。（はじめてのことで、とてもワクワクして、この日を待ちました。とてもうれしいです。） ③プロの方も合唱の方々も、とてもすばらしかったです。④初めて

＜10＞ ①バッハ・カンタータを 20 歳台から聴いています。始めに 140、147（カップリング CD:フリッツ・ベルナー指揮）から聴き始めました。自分の結婚式の入場に、今回の 140 番を使いました（もう 30 年も前)。 ②今回は日本語でもよく理解しやすい選曲だと思いました。「Bist du bei mir」は大変好きで、ドイツ語でひとりで歌っています。③できれば、参加しやすい、アクセスの良い会場を希望します。いつもすばらしい演奏会をありがとうございます。④それ以上

＜11＞ ①とてもよかった。②すばらしい。④2 回目

＜12＞ ②プログラムを開くまで(というのは、開演直前まで)日本語上演ということを認識していなかった！ 実に「不覚」千万。独唱では理解（Hörverstehen）[聞き取り、リスニング、聴解（編集注）]に効果が認められる。声部が独立した合唱では原語と変わらない。③設備のあるホールであれば、原語字幕付きが望ましい。（そうでなければプログラムに載せるべし）④2 回目、たぶん

＜13＞ ①カンタータ 14 番の最後のコラールは凄いコラールです。Bach に圧倒されます。カンタータ 82 番の最後のアリアが良い。この世で怖れる死は、復活につながる希望があるから恐くない。バスの山本さん、素晴らしい。②ドイツ語での上演を希望。字幕が横に出るといい。（でも会場の設備によりますね） ③この時期、オーバーやマフラーやかばん等、かさばるので、クロークがほしい。欧米ではクロークのない劇場はほとんどない。④それ以上

＜14＞ ①静かな中に情熱を感じた。②大変すばらしい。④それ以上

＜15＞ ①Sop の高い部分が低く感じて残念。よくここまで、合唱をまとめられたと感心します。140 番に大満足!! ②聴いて理解できるのがうれしい。ドイツ語から日本語への訳のご苦労に感謝。③すばらしいオルガンのあるホールでの演奏、楽しみに参りました。オルガンソロも聴きたかった。大村先生のご健康が守られます様に。④4 回目

＜16＞ ①ソリストも合唱も素晴らしかった。最後の 140 番のカンタータの企画（アンコール）は楽しかった。②わかりやすく、言葉が身に染みました。④それ以上

＜17＞ ①バッハは紛れもなく天才と思いますが、実は複相的な人かと考えます。逆説的ですが、カンタータを聴くと、領邦システムが相対的安定期を迎えつつある時、世俗

―終了報告―

東京バッハ合唱団 第 114 回定期演奏会
日時：2016 年 12 月 3 日（土)、14:00 開演
会場：府中の森芸術劇場ウィーンホール
＜曲目＞
・カンタータ第 14 番《かたえに 主いまさずば》
・「アンナ・マクダレーナ・バッハの音楽帳」1725 より 10 曲の声楽作品
・カンタータ第 82 番《われ 足れり》（B 独唱）
・カンタータ第 140 番《目覚めよと呼ばわる物見の声高し》
＜出演＞
S 光野孝子、T 鏡 貴之、B 山本悠尋
org 草間美也子、orch 東京カンタータ室内管弦楽団
chor 東京バッハ合唱団、cond 大村恵美子

的成功を願った彼が窺えるような気がするのです。イングリッシュホルンを加えたオール・ダブルリードの木管の響きというのはすこぶる良いですね。現代でもこの編成で楽曲が作られて欲しいです。②非常に斬新と思いました。聴いて分かるというのは、声楽曲については本来、決定的に重要なはずですから。驚かされたのは、日本語での演奏に違和感がなかったことです。訳詞が彫心鏤骨の成果ということでしょうか。凄いことです。④初めて

＜18＞ ①好演でした。②初めて日本語版を聞きましたが、違和感をあまり感じませんでした。こういう演奏の在り方もあるのかなと、興味をもちました。④初めて

＜19＞ ①ものすごくレベルアップなさっていました。②毎回、これでお願いします。発音も良くなりました。③演奏会場の場所が遠すぎて、これからは困難かなと感じています。④それ以上

＜20＞ ①よく知られる曲もあり、変化もあり、楽しめました。合唱部分も良かったです。人数が少し減ったようですが、ハーモニーはとても美しく、良かったです。140 番の合唱は、メリハリが利いて素敵でした。p→f。②今回とくに日本語の歌詞が胸にしみました。人生の終末について考える内容だからでしょうか。日本語だからこそ、心に響くのだと思いました。ソリスト、特にテノールの方の明快な発声・発音が良かったです。情感豊かで安定しています。バスのアリアもしみじみ聴きました。バスの山本さんは若さの中に深みが加わった様に感じました。ソプラノも美しい歌声ですね。少し歌詞が分かりづらいのが残念です。合唱のバス・テノールのみの部分も良かったです。皆さんの声に聴きほれました!!

＜21＞ ①男声が少し弱いかな。②CD で聴いたときは、(響きの点で)う～んと思いましたが、生コンサートでは歌詞が理解できるのがいい。③なかなか良いホールですね。④初めて

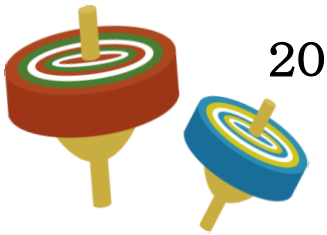
＜22＞ ①ソリスト、オケ、心からの演奏ありがとうございます。すばらしいプログラムでした。カンタータ82番バスsolo、ありがとうございました。②たいへん心に残る日本語訳で、来てよかったといつも思うのです。感謝です。人生の残りあとわずかと思えば、ことさらに。

＜23＞ ①じっくり聴かせていただきました。②格別です。④それ以上

＜24＞ ①清らかないい感じでした。②「アンナ・マクダレーナ・バッハの音楽帳」は、とくに日本語がしっくり合っている気がしました。③バスの独唱がとても気持ちがよかったです。④それ以上。友人からご案内があって。

＜25＞ ① 1)カンタータ第 14 番:ちょっと残念な演奏でした。ソプラノパートが上ずっているうえ、合唱が溶け合っていませんでした。ソプラノ・ソロもエンジンが温まっていなくて、全体的に不完全燃焼といった感じでしょうか。 2)『音楽帳』:こちらは1曲目とは打って変わって、素晴らしい演奏でした。特に終曲は十分な迫力と、合唱が見事に溶け合って素晴らしかったです。3)カンタータ第82番:《マタイ受難曲》第 47 曲アルトのアリア「憐れみたまえ、我が神よ」に良く似ています。この曲はすごく好きです。オーボエの前奏とオブリガートがすばらしかったです。第3曲、第 4 曲ではオーボエが休みで、くすんだ響きも良かったと思います。この曲はバスではなく、女声(コントラルト)で聴いてみたいです。4)カンタータ第140番:有名曲だけあって、合唱も自信に満ちて、十分な声量もあり、ハーモニーも素晴らしかったです。ただ、ところどころ肩に力がはいっていたのでしょうか、縦の線が雑な感じがしました。第 4 曲はとても好きな曲です。数十年前までは、バッハのこの曲や他のカンタータ、あるいはオルガン曲などを管弦楽に編曲して盛んに演奏していました。ミュンヒンガーやストコフスキーが有名です。30 年くらい前から原典(至上)主義が主流となり、このような編曲による演奏がほとんど聴かれなくなりました。個人的には残念なことだと思っています。今回も素晴らしい演奏をありがとうございました。
②私は日本語の演奏には大賛成です。もともとのテキストはドイツ語ですが、この言葉は子音が汚いので、歌にはあまり向かないような気がします。ワーグナーの楽劇なども素晴らしいのですが、何分、子音の汚さに辟易するときがあります。そこへ行くとラテン語やラテン系のイタリア語などは歌にするにはきれいですし、日本語も同じだと思います。次回は《ロ短調ミサ曲》ですが、こちらは元がラテン語なので日本語にしても全く違和感がないのではないかと推測します。次回の演奏会を楽しみにしています。(メール)

∞ ∞



2017 年(新年)の初夢はいかに？

大村 恵美子（主宰者）

みな様、新年のお喜びを謹んで申しあげます。騒然たる世相、あちこちの指導者がそろって指導力を失い、首都の中心までテロに乗っとられたり、民族大移動かと見まがうばかりに、あらゆる階層の自国民を惨愴たる難民につき落として、地の果てまで彷徨させるのを放置したり、このような恐怖にみちた年末から、どんな新年が引き継がれるのか、見当もつきませんが、それでもやはり「明けまして おめでとうございます」と、悲願をこめて、それぞれの場で呼び交わさなければ、と思います。

いま、これからご紹介しようとするのは、限定された〈初夢〉ではないのですが、昨年 4 月号の月報（No. 646）に、私は、このごろ毎晩のように現実に近い夢を見る、という打ち明け話風のエッセーを書きました。今でもそれはあい変わらずで、起きたときに、この夢は多分、日中のこれこれの出来ごと、あるいはニュースの見聞き、読書の影響なのだろうと推察されることが、生々しい幻像となって、睡眠中の私を襲いつづけています。不快感と共に目ざめることもあれば、ああ、もっと続けて見ていたかった、と惜しまれるような場合もあります。

その中の一つですが、起きたばかりに、これは完結した夢に近く、記憶に残っていて、今後の私の課題で

もありえよう、という印象をもって書きとめたものがありました。推察するに、論争の激化にとどまらず、政界の未来設計にもつよく作用しそうなこと。それから、これは常時私に苦痛を与える問題ですが、犬猫等のペットが、孤独な人間たちの欲望をそそって大産業と化すまでに、深刻な絆をつくり出していることも、夢の土台となっています。そんなこんなで、一連の夢ものがたりを記憶にとどめてしまったようでした。まず、一昨年（2015 年）末に、もう私の体力では、最後になるかもしれない思いで、イタリア１週間旅行をしました。1960 年代から留学・旅行で友人関係となった外国人は、もうほとんど他界してしまい、ヨーロッパに行っても迎えてくれる人はないのだという淋しさを味わいました。人間同士通じたいのにそれができないという無念さは、ＩＳ出現の歴史とその実体の、ドイツ人ジャーナリストによるルポ(『イスラム国の内部へ―悪夢の 10 日間』) を読んだせいで、リアリティーが大いに増大しました。

夢のはじめは、例によって、私がひとりで渡欧し、スケジュールに配慮しながらも、交通機関の故障などで、洪水後のズタズタに切断され、泥だらけ・穴だらけの道を歩いていると、旧友の中年フランス女性M-Oが樹の上の枝につかまって、迎えてくれます。ここを乗り切ればお宅まで着けるのかと訊くと、「多分行けそうよ」と心もとなく案内を始める。シーンは変わって、どうやら大きなホテルに泊まれたようだが、今度の相手は、パリの劇見物で識り合って、別れてもずっと文通しあっていた、神学生Ｊ－Ｊ（その頃は青年だった）が待っていました。ところが、ホテルの通路やロビーには、けっこう大ぶりな野生動物が往来しているのです。犬のチンみたいな、ベージュ色の動物は、あちこちで人々にすばやく噛みついています。「かむと痛いんでしょう？」とこわがると、「それほど痛くはないよ」と平気をよそおうＪ－Ｊ。こんどは熊ぐらいに大きくどう猛な、黒い動物が、目標を定めて足早に近づく。人々は血相をかえて、進路をジグザグに逃げている。Ｊ－Ｊは、「あれは数が少ないから大概、大丈夫」と、またあいまいな返事。

次のシーンでは、むかし合唱団に在籍していた、シェル石油勤務のオランダ人中年男性Ｇ・Ａが、もうひとりの仲間と２人で、私を自家用車で送ってくれているところ。「ヨーロッパも、今は何だか物騒になった感じね」と本音を訴えると、「いや、そのホテルがたまたまコントロールの利かない所だったんでしょ」とごまかしの答え。間がおかれて、私は彼らと別れて、日本行きの空港で待ち合わせることになったが、結局約束の場には現れず、私はひとりで苦労して帰宅する。Ｇ・Ａは、破約の言い訳もなしに先に着いていて、世の中は、そう決まった通りには運ばない、そんなものよ、という顔をしている――。

いま合唱団では、今年 11 月の《ロ短調ミサ曲》演奏に向けて、新入団員も迎えて練習にとりかかったばかりですが、せっかく地元の大きなホール（杉並公会堂、1190 席）が予約できたのに、団員数が足りないままでは……と懸念もあります。見学にいらしても、むずかしすぎるとか、家の事情でつづかないとかで、すぐ止められる方も多い。でも、私は、この合唱団のゆく末も、神に委ねて、日々の努力をたゆまず重ねてゆこうと“50 年 1 日”のごとく、歩んでゆきます。「あなたのお仕事に、神のご加護を」という眞摯なエールのおたよりも多く、何よりも心に届きます。「ありがとう」の一言です。最後まで、わくわくと心躍る人生を、ご一緒に味わいつつ完走してまいりましょう。

<了>

次回公演・第 115 回定期演奏会

《ロ短調ミサ曲》日本語版、再演

＝ 参加団員募集＝

2017 年 11 月 23 日（祝）14 時開演、杉並公会堂

S 光野孝子、A 谷地畝晶子、T 鏡貴之、B 山本悠尋

指揮/訳詞･大村恵美子

東京バッハ合唱団 & 東京カンタータ室内管弦楽団

東京バッハ合唱団は、2017 年、創立 55 周年を迎えます。5 年前、内外の合唱界に衝撃をあたえた「日本語による《ロ短調ミサ曲》」の再演をもって、この節目の年を記念することとなりました。

あわせて宗教改革 500 周年の年、バッハの老舗合唱団としては、敢えてルターの詩によるカンタータを撰ばず、ミサ通常文をテクストとした、バッハ畢生の大作をもって、作曲家自身が極めた“普遍”の魂を歌い上げようとしています。ぜひご参加ください。

ラテン語上演経験者、歓迎。「日本語バッハ」の奥深さ、格別です。

◇新規練習開始： 2017 年 1/7（土）荻窪。**1/9（月）は臨時に「荻窪」に変更（18:30 - 20:30）。ご注意!!**

◇練習時間と会場（どちらにも出席可）

・土曜練習……15：30 - 17：30、（日本基督教団）荻窪教会（杉並区荻窪 4-2-10）

・月曜練習……18：30 - 20：30、目白聖公会（新宿区下落合 3-19-4）

◇募集人数： SI・SII・A・T・B、各 10 名程度（先着順）

◇応募資格： バッハ音楽が好きな方、合唱経験不問。決して易しくはありませんが、各パートの音取りＣＤを用意、また懇切なパート練習も行う予定。先ずはお気軽に見学にいらしてください（両所とも練習時間内。予め事務局にご一報の上）

◇入団金 3000 円、団費月額 5000 円、他に公演経費の一部分担あり。

◇参加申し込み： ハガキ／FAX／メール／電話等にて合唱団（下記）あて。書面の場合は、①氏名、②声部、③住所、④連絡先（電話番号/メールアドレス）を記入。問合せ/申込み： 東京バッハ合唱団事務局